

# ダチョウの初期育成技術

## 1. 目的

ダチョウは、全国で飼養が始まり約10年を経過するが、人工初期育成技術が難しく、農家自身の試行錯誤の状態であった。そこで、育成率が20～30%と言われている初期育成について環境条件等の違いによる発育への影響を調査し育成率の改善を図った。

## 2. 試験方法

ダチョウ初生ヒナ（導入：南アフリカ共和国、品種：アフリカンブラック種）を床面積3.6m×3mの区に各5羽用い、試験期間は平成12年6月1日～7月31日の2ヶ月間である。試験区分について、1区は電気ブルーダーとヒーターマットによる保温、2区は電気ブルーダーのみの保温、3区はヒーターマットのみの保温を行った。ただし、鶏舎内はエアコンで25℃とした。給与飼料について、餌付けは5日齢よりダチョウ配合飼料と粉碎ヘイキューブ、緑餌（季節の野菜）を給与し、給水は餌付け時に経口補液剤を用い、その後は水道水で不断給水とした。

## 3. 成果の概要

1区は電気ブルーダー直下から床上15cmで38羽、ヒーターマット中央部で39羽、周辺部で34羽ありヒナは電気ブルーダーとヒーターマットに集まった（写真1）。3区は1・2区のように改良型電気ブルーダーからの熱源がないためヒーターマット上に体を伸ばして寝ていた（写真3）。餌付け開始5日齢の体重は全区とも0.8kg、1ヶ月齢では全区とも2kg前後であった。2ヶ月齢では1区の発育が最も優れ10.9kg、次いで2区9.2kg、3区に至っては3.2kgと発育不良となった（図1）。1・2区の育成率は100%に対し、3区は60%と低かった。増体重、飼料消費量及び飼料要求率は、1区の増体重、飼料消費量が最も優れ、飼料要求率は1.25となった（表1）。生後7日齢で死亡した3区のダチョウヒナを解剖したところ、遺残卵黄があり原因は温度不足による卵黄吸収不全で死亡したと考えられた（写真4）。

写真1 1区:電気ブルーダーとヒーターマットによる保温



写真2 2区:電気ブルーダーのみの保温



写真3 3区:ヒーターマットのみの保温

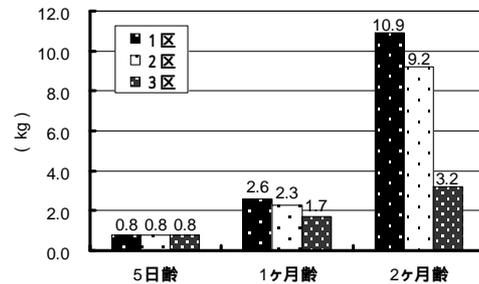


図1 環境条件が发育に及ぼす影響

表1 増体重・飼料消費量・飼料要求率

	育成率 (%)	増体量 (kg)	飼料消費量 (kg)	飼料 要求率
1区	100	8.3	10.4	1.25
2区	100	6.9	8.4	1.22
3区	60	1.5	2.6	1.73

写真4 卵黄吸収不全



環境条件による初期育成試験終了後、継続して体重を6ヶ月齢まで調査した。1区の平均体重が72kgと发育がよく、2区は68kg、1・2区とも飼料要求率2.5であった。しかし、3区は3ヶ月齢で全羽数、发育不良で死亡した(図2)。このことから、餌付け時の環境条件がその後の发育に及ぼす影響に極めて大きく、ここで失敗するとその後の发育が望めないことがわかった。

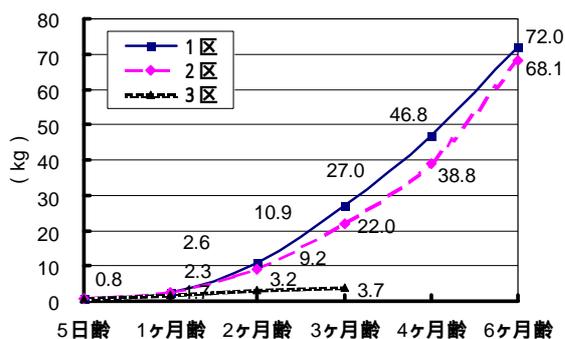


図2 6ヶ月齢までの体重の推移

以上のことから、初期育成時の環境条件は改良型電気ブリーダーとヒーターマットで上下から保温することにより相対湿度を下げ、限られた空間を乾燥状態に保つことが育成率を上げるうえで大変重要であることがわかった。

#### 4. 普及上の留意事項

育成率を改善する上で重要なことは、餌付け後5日～15日齢の飼養管理、特に温度管理と湿度を適切に保持してやることである。また、7日齢で体重を測定し初生時と比較して15%以上減少した場合は、強制的に1日2回練り餌を数日間、経口投与し体力の回復を図るなど、ヒナの異常を早期に発見し、早急な対応を施す必要がある。対応が遅れるほど死に至る確立が高くなる。

(養鶏試験場・主任研究員・難波江祐介)